

# 横浜市緑区で採集されたオオゴムタケ

生 出 智 哉

1978年10月15日、横浜市緑区三保市民の森で実施した神奈川県キノコの会主催の採集会に於て、多くのキノコに混じり、ブヨブヨした風変りな形をしたキノコが2個体見つかり、今関六也により、オオゴムタケと同定された。翌年10月14日の同地での採集会では、遠藤三枝が再び朽木に多数の子実体が発生しているのを見つけた。神奈川県キノコの会は今までに、県内各地で採集会を行なったが、本菌を採集したのは、三保市民の森だけである。県外での記録も少ないようなので、簡単に報告する。

オオゴムタケ *Galiella celebica* (P. HENN.) NANNF. は、子の菌類、チャワಂತケ目、オオゴムタケ科に属し、ゴムのように弾力に富むキノコである。倒円すい形で黒褐色を帯び、上面は平らで、直径4~7cm、高さ3~4cm、外面はざらざらしており、不規則な横じわが見られ1mmほどの短かい褐色の毛で覆われている。内部は淡褐色の寒天質である(1979年の観察)。下面の中央付近で木に着生しているが、柄はなく、春から秋にかけて広葉樹の朽木に生えといわれる。

わが国におけるオオゴムタケの採集記録は、原寛が1930年と1932年の10月、群馬県水上で朽木に生えているのを採集し、結果を植物研究雑誌に報告している。これが日本における最初の記録である。オオゴムタケという和名もその際、川村清一が新称として発表したものである。2回目の報告は、小林義雄が、1935年10月東京都高尾山で採取したものにもとづいてなされている。

日本産のオオゴムタケの学名については、はじめ原(1933)は、欧州産と同一種と考え *Sarcosoma platydiscus* (CASP.) SACC. をあてた。しかしその後、小林(1938)は日本産オオゴムタケはセレベス島から記載された *S. celebicum* (P. HENN.) と、同一の分類群に属するものであることを明らかにするとともに、これを独立種と考えずに欧州産の *S. platydiscus* の変種とするのが妥当であるとして *S. platydiscus* var. *celebicum* (P. HENN.)

Y. KOBAYASI という新しい組合せをつくり発表した。戦後、スウェーデンの NANNFELT は、欧州産とセレベス島産とを比較して、セレベス島産の菌は孢子に細かい疣があり、欧州産の *Sarcosoma* 属の孢子が平滑であるなどの理由をあげて別属の *Galiella* 属とした。大谷吉雄(1973)は日本産のオオゴムタケの孢子が、*Galiella* 形であることを確かめ、その学名に、*G. celebica* (P. HENN.) NANNF. を適用すべきであるとした。従って、日本のオオゴムタケは欧州系のもではなく、南方系の菌ということができる。

なおオオゴムタケと比較して小形で形も良く似ているゴムタケ *Bulgaria inquinans* Fr. は、分類学上はビョウタケ目の菌で、子囊の先端に蓋がなく、ズキンタケ科に属する。なおオオゴムタケの孢子は、ほとんど無色であるが、ゴムタケの孢子が暗褐色で成熟すると黒い粉となって放出されるので、両者は肉眼的にも区別することができる。またオオゴムタケ、ゴムタケは食用に供される。

本稿をまとめるにあたり、元日本菌学会会長、神奈川県キノコの会顧問今関六也先生には、懇切な御指導をいただいた。オオゴムタケを採集され調査に協力いただいた横浜市西区遠藤三枝氏にもあわせて厚く御礼申し上げる。

### 参考文献

原 寛	1933	奥利根ニアル興味深キ子囊菌(一) 植物研究雑誌, 8(8): 391-395.
小林義雄	1938	ブルガリア菌類群ニ就テ. 植物研究雑誌, 13(7): 510-520.
小林義雄	1939	日本隠花植物図鑑: 326. -327 三省堂.
大谷吉雄	1973	原色学習ワイド図鑑10, 海藻・菌類 109(図), 187(解説) 学習研究社.

OIZURU, Toshiya; A brief note on *Galiella celebica*, (*Ascomycetes*) collected in Yokohama. 神奈川県立博物館

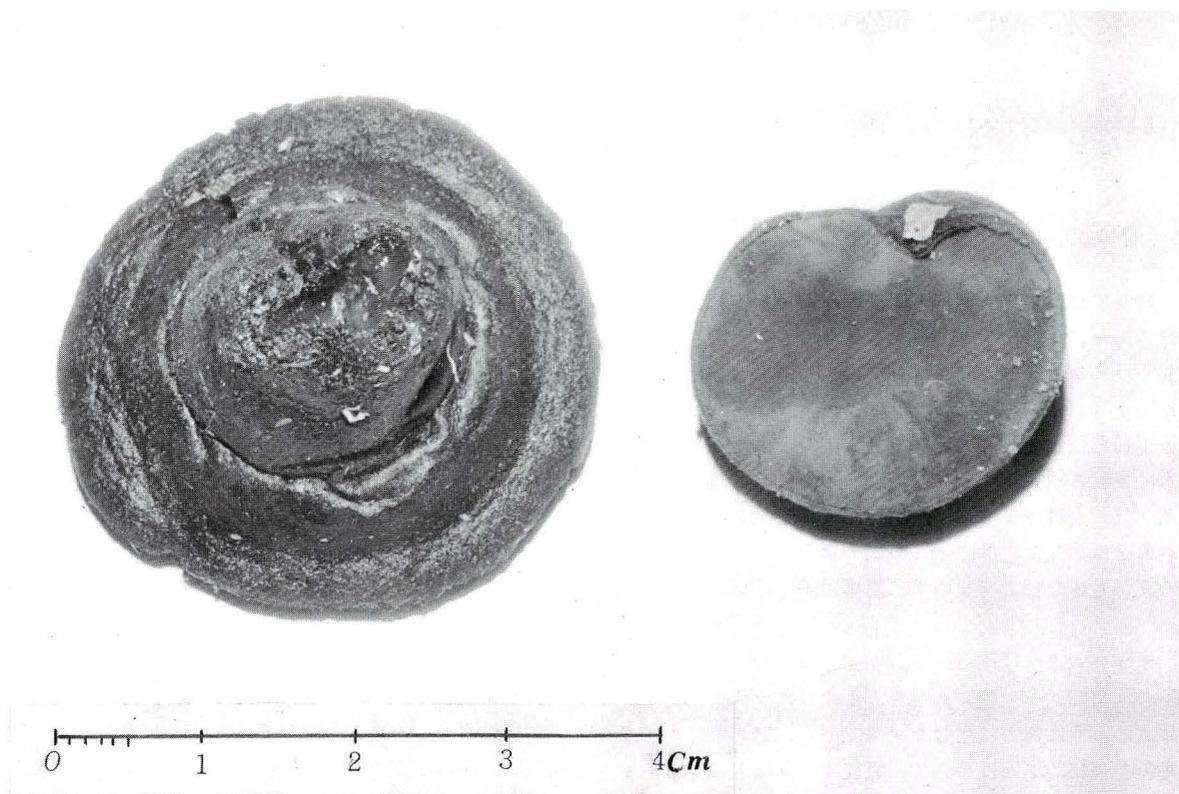


図1：オオゴムタケ *Galiella celebica* (P. HENN.) NANNF. 横浜市三保市民の森 1979. 10. 14 採集  
オオゴムタケの下面(左)と上面(生出原図)

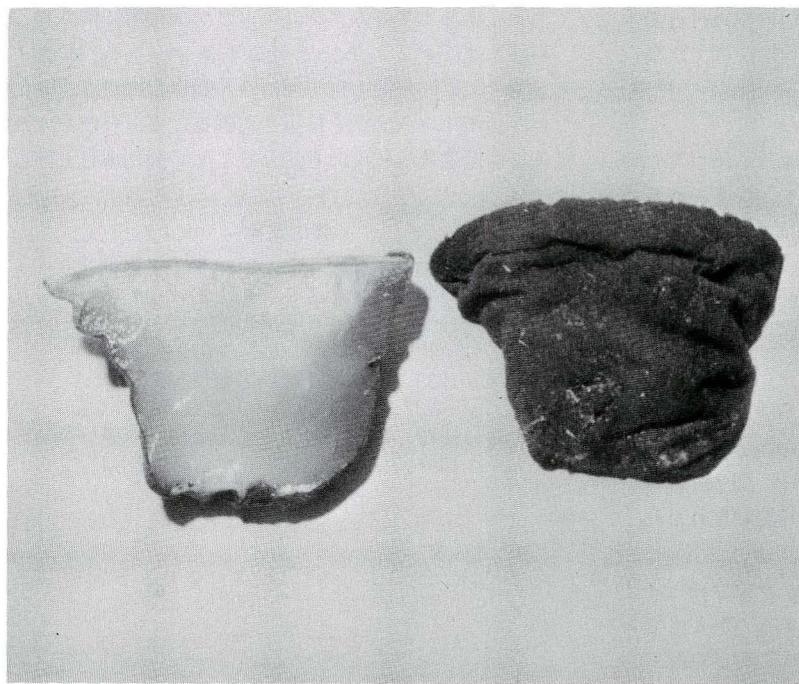


図2：オオゴムタケの横断面(今関原図) 横浜市三保市民の森 1979. 10. 14 採集